熊本県葦北郡芦北町田浦方言の二型アクセント体系[1]

松　森　晶　子

１．はじめに

本稿は、熊本県葦北郡芦北町の田浦方言のアクセントの記述・報告である。この田浦方言を含む九州西南部の諸方言は、語の長さにかかわらず２種類の型が対立する「二型アクセント体系」を持っている。その九州の二型アクセント体系内の２種類の型を、本稿では（これまで同様）「Ａ型、Ｂ型」と呼ぶこととする。

その九州二型アクセント体系のうち、長崎県の長崎市、諫早市、島原市、佐賀県の鹿島市、太良町など、長崎県や佐賀県に広く分布する二型アクセント体系では、そのＡ型には、アクセントの実現する単位（以下、「文節」と称す）の頭から数えて２つ目の拍直後にピッチの急激な下降が観察され、これに対してそのＢ型には、文節全体を通してピッチの急激な下降や上昇の見られない、比較的平坦な型が観察されている。

このような特徴を持つ長崎県や佐賀県の二型アクセント体系のことを、本稿では、便宜的に、松森（2017b）にしたがって「佐賀・長崎主流タイプ」と呼ぶこととしよう。

この佐賀・長崎主流タイプの２種類の型を、今きわめて単純な形で図式化するならば、次の⑴のようになるだろう。（以下、本稿を通じて、高い音調をＨで、低い音調をＬで示す。）

⑴ 佐賀・長崎主流タイプの二型アクセント体系における２種類の型の違い

Ａ型	ＨＬ	ＨＨＬ	ＨＨＬＬ	ＨＨＬＬＬ	ＨＨＬＬＬＬ
Ｂ型	ＨＨ	ＨＨＨ	ＨＨＨＨ	ＨＨＨＨＨ	ＨＨＨＨＨＨ

さて松森（2017a）では、長崎県西彼杵郡の旧・外海町（現在は長崎市に属す）方言の二型ア

---

[1] 本稿は科研費補助金基盤研究（Ａ）（課題番号26244022）、および国立国語研究所の共同研究「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の助成を受けている。なお本稿で取り上げた田浦方言をはじめとする芦北町のアクセント調査［2017年６月実施］に当たっては、熊本県葦北郡芦北町教育委員会の生涯学習課の皆様に大変お世話になりました。記して篤く御礼申し上げます。

クセント体系の記述を行い、この体系が、(1) に示された佐賀・長崎主流タイプの体系とは、明らかに異なる特徴を持っていることを指摘した。とりわけそのＢ型にＨＬＨ、ＨＨＬＨ、ＨＨＨＬＨ…のような、いわゆる「重起伏音調」が出現する型（ひとつの文節内に２つの高いピッチの山が現れる型）が存在することが、その旧・外海町のアクセント体系の持つ、もっとも際立った特徴であると言えよう。

続く松森（2017b）では、現在は文節全体にわたって平坦な型が持続する佐賀・長崎主流タイプのＢ型も、かつては重起伏音調を持っていた時代があるのではないか、という推定を行った。そして松森（2017b）は、九州二型アクセントの祖体系に、次の（2）に図式化されているような二型アクセント体系を仮定した。

(2) 九州西南部二型アクセント体系の祖体系（仮説）[2]

	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語
A型	*LH（LHL）	*LLH（LLHL）	*LLHL	*LLHLL	*LLHLLL
B型	*LH（LLH）	*LLH（LLLH）	*LLLH	*LLLLH	*LLLLLH

さらに松森（2017b）は、(1) に示された佐賀・長崎主流タイプの二型アクセント体系のＢ型に見られる平坦な型は、過去のある時期に、次の（3）に示されるような一連の変化が、(2) の体系内のＢ型の祖型に起こることによって生まれたのではないか、という通時的仮説も提示した。

(3) 佐賀・長崎主流タイプのＢ型に起こった変化（仮説）[3]

*LLLH ＞ *HLLH ＞ *HHLH ＞ HHHM（HHHH）

---

[2] 木部（2012: 80）は、その特徴の違いによって、九州二型アクセント体系全体を次のように大別した。
鹿児島タイプ：　アクセント単位の末尾のほうに、ピッチの下降や上昇が現れる。
長崎タイプ：　アクセント単位の最初の部分に下降が出現する。
「鹿児島タイプ」に分類された方言の代表である鹿児島市方言は、アクセント単位（文節）の末尾から数えて最後の音節が下降する型（A型）と、末尾の音節が上昇する型（B型）の２種類の型から成る。これに対して「長崎タイプ」の代表である長崎市方言は、アクセント単位（文節）の頭から数えて２つ目の拍の直後にピッチが下がる型（A型）と、きわだった下降がなく、全体的に平坦な音調が持続する型（B型）の２種類から成る。

これに対し松森（2017ｂ）の提示した九州二型アクセントの祖体系は、A型が文節の頭から数えて最大３つ目の拍直後に、B型が文節の最後尾の拍に、H音調を持つシステムである。つまり、松森（2017b）は、九州二型アクセントの祖体系に、いわゆる長崎式とも、鹿児島式とも異なった体系を建てることを提案したことになる。

[3] 松森（2017b）は、その最終段階の変化（*HHLH＞HHHM（HHHH））が起こったことを契機にして、特定の条件のもと、複合語の２種類の型が同じ型に合流した、と推定し、それによって現代の佐賀・長

つまり、佐賀・長崎主流タイプのＢ型も、いったんは、現代の旧・外海町のＢ型と同様な重起伏音調を経た後に、現代に見られるような平坦な型へと変化を遂げた、とする通時的仮説を、松森（2017b）は提示したことになる。

このような仮説を前提として、筆者は、（1）に示した佐賀・長崎主流タイプの体系を取り巻くように分布している二型アクセント体系の中には、依然としてそのＢ型がＨＬＨ、ＨＨＬＨ、ＨＨＬＬＨ… のような重起伏音調を持つ体系が、（上述の旧・外海町方言の他にも）存在するのではないか、という予測をたてた。

そこで、2017年６月に、地理的に見て、佐賀・長崎主流タイプの観察される地域を挟んで旧・外海町とはちょうど反対側に位置する、熊本県葦北郡芦北町の二型アクセント体系の調査[4]を行った。

その結果、当初の予測どおり、芦北町北部の「田浦」という集落に、明瞭な重起伏音調が、そのＢ型に観察される体系が存在することを確認した。本稿は、そのことの記述・報告である。

しかしながら、田浦方言のＢ型の重起伏音調と、旧・外海町方言のそれとには、ひとつだけ異なる傾向が見られた。それは、旧・外海町のＢ型の重起伏音調が現在（特に文節が短い場合に）消滅の兆候を示している（松森2017a）のに対して、田浦方言にはそのような兆しは見られず、そのＢ型には重起伏音調が安定して観察される、という点である。

一般的に不安定な型である、と考えられているにもかかわらず、この田浦方言の体系では、Ｂ型に出現する重起伏音調が明瞭に保たれているのは、いったいなぜであろうか。この理由については、本稿の第５節において考察する。

以下は、特にこのＢ型に出現する重起伏音調に焦点を当てながら、田浦方言の二型アクセント体系の記述を行うこととする[5]。

崎主流タイプの複合語内部における型の中和現象を説明する、という試みを行った。これに対し、現代の長崎県の波佐見町や旧・外海町の体系には、（3）の最終段階の変化（すなわち *HHLH＞ HHHM（HHHH））は生じなかった。そのために、同様な中和は生じていない、と松森（2017b）は推定した。後述するが、旧・外海町と同様、現代の体系においてＢ型がHHLHのような重起伏音調を持つこの田浦方言でも、複合語内部の型の中和現象は生じていないが、この点も予想どおりである。すなわちこの田浦方言も、そのＢ型が、本稿の（3）に想定された一連の変化過程のうちの最終段階（すなわち *HHLH＞ HHHM（HHHH））の変化を経ていない。そのため、上述のような複合語の型の中和は、生じないことが予想されるからである。

[4] 今回の芦北町の調査では、この田浦のほかにも、黒岩（くろいわ）、計石（はかりいし）という２つの集落のアクセントを調査した。その結果、この３つの集落はすべて二型アクセント体系を持っているが、体系内部の２種類の型の実質は、それぞれに異なることが分かった。黒岩、計石の体系の持つ特徴については、再度、詳細な調査を行ったうえで、あらためて報告したい。

[5] 調査は2017年６月に行われた。話者は、Ａ氏（昭和11年12月生まれ、男性）とＢ氏（昭和22年８月生まれ、女性）の２名である。

２.「葦北音調」とは何か（出水市方言を例にして）

熊本県の葦北郡を中心とする二型アクセント体系の地域には、古くから、平山（1951）によって「葦北音調」と名付けられた体系が、広く分布すると考えられてきた。その葦北音調を、ＨとＬを使用しながら、ごくおおまかに図示すると、次のようになる。

(4) 葦北音調における２種類の型の違い[6]

A型	ＨＬ	ＨＨＬ	ＨＨＨＬ	ＨＨＨＨＬ	ＨＨＨＨＨＬ
B型	ＨＨ	ＨＨＨ	ＨＨＨＨ	ＨＨＨＨＨ	ＨＨＨＨＨＨ

さて、この (4) に示された体系を、(1) の佐賀・長崎主流タイプの体系と比較してみると、その違いは主にそのＡ型にあることが分かる。前述のように、(1) の佐賀・長崎主流タイプのＡ型は、文節の頭から数えて２つ目の拍直後にピッチ下降が生じる。これに対して、(4) の「芦北音調」のＡ型は、文節の最後尾から数えて２つ目の拍までが高く、その拍直後にピッチの下降が生じている。この点において、両者は大きく異なっていると言えるだろう。

「葦北音調」の具体例として、以下に鹿児島県の出水（いずみ）市の二型アクセント体系を挙げる。

(5) 鹿児島県出水市方言の二型アクセント体系

A型	トリ] が (鳥が) ハコ] が (箱が) ウルシ] が (漆が) アズキ] が (小豆が) ベントー] が (弁当が)
B型	ク[ズ が (屑が) ハ[ナ が (花が) ク[スリ が (薬が) ネ[ズミ が (鼠が) [ユービン が (郵便が)

---

[6] 筆者の1997年10月の調査では、明治41年生まれの鹿児島県出水市出身の話者（男性）の複合語のアクセントに、次のような音調交替が観察された。

A型	ヌノキリバサ] ミ、	ヌノキリバ] サ [ミ] が…	(布切鋏、布切鋏が)
B型	イトキリバ] サ [ミ、	イトキリバ] サミ [が…	(糸切鋏、糸切鋏が)
A型	サクラキリバサ] ミ、	サクラキリバ] サ [ミ] が…	(桜伐り鋏、桜伐り鋏が)
B型	ツバキキリバ]サ[ミ、	ツバキキリバ] サミ [が…	(椿伐り鋏、椿伐り鋏が)

このうちのＡ型の示す交替については、あらためて別稿で取り上げて論じることとして、ここでは、Ｂ型のほうに観察される重起伏音調に着目してほしい。このデータは、この出水市方言のＢ型も、元来、２つのＨ音調の山を持つ重起伏音調から生じてきた可能性があることを示唆している。つまり、現代ではＢ型に平坦な型が観察される出水市方言においても、かつては、そのＢ型が ＨＨＬＨ、ＨＨＨＬＨ…のような重起伏を持つ時代があった可能性があり、その痕跡がこのような文節全体が長い場合に限って残されている、と推定することができる。

さて、(4) に示された葦北音調は、現在の熊本県葦北郡において、はたしてどのくらいの地理的範囲に広がって分布しているのだろうか。これは現時点では定かではなく、今後の詳細な調査によって、確認していかなければならないだろう。

しかしながら、今回調査を行った芦北町田浦方言の体系だけに限って言うならば、この方言の二型アクセント体系は、(4) に示された「葦北音調」とは明らかに異なる性質を持っていることが、明らかになった。

３．熊本県葦北郡芦北町田浦方言のアクセント体系の記述

3.1.　その二型アクセント体系の性質

調査によって明らかになった熊本県葦北郡の芦北町田浦方言の二型アクセント体系を、まず、単純化した図によって示すと、以下のようになる。

(6) 芦北町田浦方言の二型アクセント体系における２種類の型の違い

A型	ＨＬ	ＨＨＬ	ＨＨＨＬ	ＨＨＨＨＬ	ＨＨＨＨＨＬ
B型	ＬＨ	ＨＬＨ	ＨＬＬＨ	ＨＨＬＬＨ・ＨＨＨＬＨ	ＨＨＨＬＬＨ・ＨＨＨＨＬＨ

Ａ型だけに関して言えば、この田浦方言の体系は、(4) に示された葦北音調のそれと、大きくは変わらない。両者ともそのＡ型は、原則的にその文節の最後尾から数えて２拍目に、際立ったピッチ下降を持っているからである。

この田浦方言の体系が、(4) の葦北音調と大きく相違している点は、主としてそのＢ型にある。すなわちこの田浦方言では、そのＢ型に ハ［ナ、［ハ］ナ［ガ（花、花が)、［キ］ツ［ネ、［キツ］ネ［ガ（狐、狐が）のような、重起伏音調が実現するのである。

(7) には、この田浦方言の二型アクセント体系内の、２種類の型の具体例を挙げた。以下、本稿の例の中では、「が」は主格の助詞を、… はそれが接続形であることを示す。（ここで「接続形」とは、名詞に助詞を後続させたうえで、「～がある。～がおる。～が見える。」というような文の中で当該の名詞を発話してもらった際の、最初の文節部分のアクセント型のことを示す。）なお、以下、]] と [[は、当該の拍内部に曲線音調（contour tone）が実現していることを示す。]] はその直前の拍が下降調であることを指し、[[はその直後の拍が上昇調であることを指している。

(7) 芦北町田浦方言の２種類の型（Ａ氏の体系）

	A型		B型	
１拍語	胃	［ イ]]	目	[[メ
	胃が	［ イ ］が…	目が	メ［ が…
２拍語	虫	［ ム ］シ	花	ハ［ ナ
	虫が	ム［ シ ］が…	花が	［ ハ ］ナ［ が…
３拍語	鰯	［ イ ］ワ シ ～［ イ ワ ］シ	狐	［ キ ］ツ［ ネ
	鰯が	イ［ ワ シ ］が…	狐が	［ キ ツ ］ネ［ が…
４拍語	胃薬	イ［ グ ス リ]]	目薬	［ メ ］グ ス［ リ
	胃薬が	イ［ グ ス リ ］が…	目薬が	［ メ グ ］ス リ［ が…
５拍語	薪屑	タ［ キ ギ ク ］ズ	鉋屑	［ カ ン ］ナ ク［ ズ
	薪屑が	タ［ キ ギ ク ズ ］が…	鉋屑が	［ カ ン ］ナ ク ズ ［ が…
	傷薬	キ［ ズ グ ス リ]]	粉薬	［ コ ナ ］グ ス［ リ
	傷薬が	キ［ ズ グ ス リ ］が…	粉薬が	［ コ ナ グ ］ス リ ［ が…

(7) に挙げられた例から、この田浦方言の二型アクセント体系は、(1) の佐賀・長崎主流タイプの二型アクセント体系とも、(4) の葦北音調のそれとも、明らかに異なる特徴を有していることが分かる。その特徴の要点をまとめると、次の (8) のようになるだろう。

(8) 芦北町田浦方言の二型アクセント体系の特徴

a. そのＡ型について
Ａ型のピッチの下降位置は、原則的に文節の最後尾から数えて２拍目直後に出現するが、イ［グスリ]] のように、文節の最後の拍に移動することもある。

b. そのＢ型について
Ｂ型は、重起伏音調を持っている。また、その重起伏の２つ目のＨ音調の山は、［メ ］グス［リ のように、常に文節の最後尾の拍に実現する。

このうちのＢ型の特徴は、松森（2017a）に報告された旧・外海町の二型アクセント体系のＢ型の特徴と大変よく似ている。

3.2. 田浦方言のＡ型のアクセント型の特徴

さて (8) に記述したように、田浦方言のＡ型のピッチの下降位置は、原則的に文節の最後尾から数えて２拍目直後に出現する。その典型例を示したのが、次の (9) である。以下、本節では、当該の単語を単独で発音した場合の型（以下、「単語単独言い切り形」と呼ぶ）と、それに助詞を後続させ、「～がある。～が見える。」のような文の中で発話してもらった場合の最初の文節部分の型（以下、「助詞付き接続形」と呼ぶ）とを、並べて示すこととする。

(9) 芦北町田浦方言のＡ型（その１）

	単語単独言い切り形	助詞付き接続形
桃、桃が	［モ］モ	モ［モ］が…
葱、葱が	［ネ］ギ	ネ［ギ］が…
鰯、鰯が	［イ］ワ　シ～［イ ワ］シ	イ［ワ シ］が…
桜、桜が	サ［ク］ラ	サ［ク ラ］が…
薄、薄が	ス［ス］キ	ス［ス キ］が…
胃薬、胃薬が	イ［グ ス］リ	イ［グ ス リ］が…
傷薬、傷薬が	キ［ズ グ ス］ リ	キ［ズ グ ス リ］が…

しかしながらこの田浦方言のＡ型のピッチ下降の位置は、文節の最後尾から２拍目の直後に出現する、と常に定まっているわけではなく、現在、文節の最後の拍のほうへと、移動していく傾向を示している。その結果、単語単独言い切り形では、Ａ型には、タ［キギ]］（薪）、イ［グスリ]］（胃薬）のように、その最後の拍に拍内下降が実現することがあった。次は、そのような傾向を示した語の例である。

(10) 芦北町田浦方言のＡ型（その２）

	単語単独言い切り形	助詞付き接続形
薪、薪が	タ［キ ギ]］	タ［キ ギ］が…
蜥蜴、蜥蜴が	ト［カ ゲ]］	ト［カ ゲ］が…
胃薬、胃薬が	イ［グ ス リ]］	イ［グ ス リ］が…
傷薬、傷薬が	キ［ズ グ ス リ]］	キ［ズ グ ス リ］が…
梨畑、梨畑が	ナ［シ バ タ ケ]］	ナ［シ バ タ ケ］が…

このことと関連して、助詞付き接続形においても、Ａ型のピッチの下降位置が文節の最後の拍へとずれて行く傾向も観察された。たとえば、助詞付き接続形が、次の（11a）のような型のほかに、（11b）のように出現するケースも、この方言のＡ型には、見られることがあった。

(11) 芦北町田浦方言のＡ型（その３）

		単語単独言い切り形	助詞付き接続形
a.	虫、虫が	［ム］シ	ム［シ］が…
	紙、紙が	［カ］ミ	カ［ミ］が…
b.	傷、傷が	［キ］ズ	キ［ズ　が…
	水、水が	［ミ］ズ	ミ［ズ　が…

つまりこの方言では、A型の名詞で始まる文節が常に下降して終わるとは限らず、その下降位置が当該の文節の後ろのほうへと、ずれていく傾向を示す。その結果、A型は、たとえば キ［ズ ガ…（傷が）、ミ［ズ ガ…（水が）のように、その文節全体を通してピッチ下降のない、平坦な型となって出現することもある。

そのような傾向のため、同じA型の名詞の助詞付き接続形に、２種類の型が出現することもあった。以下の例が、その典型である。その一つは、イ［グスリ］ガ…（胃薬が）のように、文節の最後尾から数えて２つ目にピッチの下降を持つケースであり、もう一つは、イ［グスリ ガ… のように、文節全体が平坦な型となって出現するケースである。

(12) 芦北町田浦方言のＡ型（その４）

	単語単独言い切り形	助詞付き接続形
胃薬、胃薬が	イ［グスリ］］	イ［グスリ］が… ～ イ［グスリが…

以上をまとめると、この田浦方言のA型は、常に文節の最後尾から数えて２つ目の拍直後に下降を持つ、というわけではなく、その最後の拍のほうに下降位置がずれることもあり、その結果、現在、そのA型は イ［グスリ］ガ ＞ イ［グスリ ガ（胃薬が）のように、その文節全体にピッチの急激な下降を持たない（つまり平坦な）型で実現する傾向にある。

このような田浦方言のA型の持つ特徴は、(5) に挙げた出水市のそれと比較してみると、特に顕著になる。出水市方言のA型のピッチの下降位置は、文節の末尾から数えて２つ目の拍の直後、と定まっている。これに対してこの田浦方言のA型の下降位置は、原則的には文節末尾から数えて２つ目の拍の直後なのだが、常にそこに定まっている、というわけではなく、文節の最後尾の拍のほうへと、移行していく兆候を示している。

3.3. 田浦方言のＢ型のアクセント型の特徴

すでに述べたように、松森（2017a）において記述・報告された旧・外海町の二型アクセント体系同様、この田浦方言においても、そのB型に明瞭な重起伏音調が観察された。次の (13) は、この田浦方言のB型に出現する、重起伏音調の具体例である。

(13) 芦北町田浦方言のＢ型

	単語単独言い切り形	助詞付き接続形
花、花が	ハ［ナ	［ハ］ナ［が…
胡麻、胡麻が	ゴ［マ	［ゴ］マ［が…
麦、麦が	ム［ギ	［ム］ギ［が…
狐、狐が	［キ］ツ［ネ	［キ ツ］ネ［が…
鶉、鶉が	［ウ］ズ［ラ	［ウ ズ］ラ［が…
鉋、鉋が	［カ］ン［ナ	［カ ン］ナ［が…
秋刀魚、秋刀魚が	［サ］ン［マ	［サ ン］マ［が…
目薬、目薬が	［メ］グ ス［リ	［メ グ］ス リ［が…
椎茸、椎茸が	［シ イ］タ［ケ	［シ イ］タ ケ［が…
鉋屑、鉋屑が	［カ ン］ナ ク［ズ	［カ ン］ナ ク ズ［が…
粒薬、粒薬が	［ツ ブ］グ ス［リ	［ツ ブ］グ ス リ［が…
花畑、花畑が	［ハ］ナ バ タ［ケ	［ハ ナ］バ タ ケ［が…

この田浦方言と旧・外海町方言との間に共通して見られるのは、このようにＢ型に重起伏音調が出現する、という点だけではない。両者は、そのＢ型の重起伏の２つ目のＨ音調の山が「文節の最後尾の拍に出現する」という点においても、共通点を持つ。この点で、両者のＢ型は、非常によく似た特徴を持っている。

しかしながら、この田浦方言のＢ型と、旧・外海町のＢ型には、その重起伏音調の消滅のし易さ、という点において、違いがあるように感じられた。

松森（2017a）で指摘したように、現在、旧・外海町のＢ型の重起伏音調は、文節全体が（特に３拍以下の）短い場合に、消滅の傾向を示している。たとえば、旧・外海町では、Ｂ型の名詞「花」の助詞付き接続形に、［ハ］ナ［ガ（花が…）という重起伏音調を持つ型のほかに、［ハナガ、あるいは ハ［ナガ のような型が出現することもある（松森 2017a)。つまり、旧・外海町のＢ型には、その重起伏音調に取って代わり、サカガ=（坂が)、カサガ=（傘が)、ツナガ=（綱が）のように（ = は、当該の文節全体に急激な下降がなく、平坦な型であることを示す)、文節全体を通じてピッチの起伏が見られない、平坦な型が出現する傾向が見られる。

これに対し、今回調査した田浦方言のＢ型の重起伏音調には、そのような消滅の傾向は観察されなかった。この方言では、文節全体が３拍以下の短い場合においても、そのＢ型には安定して、［ハ］ナ［ガ（花が…）のような重起伏音調が出現する。つまり田浦方言のＢ型の重起伏音調は、文節全体の長さ（短さ？）にかかわらず、消滅して他の型に取って代わるような傾向は見られなかったのである。

このような傾向の違いが、田浦方言と旧・外海町方言との間になぜ観察されるのか、という点については、本稿の第５節において、あらためて考察することとする。

４．その一般複合法則に例外は見られるか

4.1. 佐賀・長崎主流タイプの複合語に見られる型の中和現象
―佐賀県鹿島市のアクセント体系を例にして

さて、松浦（2005, 2008, 2014）、木部（2012）、平子・五十嵐（2016）、松森（2017a, b）などに報告されているように、佐賀・長崎主流タイプの二型アクセント体系は、特定の条件のもとでその一般複合法則に例外が生じる、という特徴を共有している。それは、「前部要素が３拍以上の語根から成る」という条件のもとに、Ａ型の前部要素とＢ型の前部要素から始まる複合名詞の型の区別が消滅してしまい、両者ともＢ型となって出現する（つまり、型の中和が見られる）、という特徴である。

本節では、以下、そのような型の中和が見られる方言の代表として、佐賀・長崎主流タイプの二型アクセント体系のなかから、佐賀県の鹿島（かしま）市方言[7]の体系を選び、上述の特徴について検討してみることとする。

佐賀県の鹿島市方言では、他の佐賀・長崎主流タイプの二型アクセント体系同様、前部要素が３拍以上の語根から成る場合には一般複合法則は成り立たず、その複合名詞は、前部要素がＡ型の場合にも、それがＢ型の場合にも、Ｂ型の型で出現する。これに対して、その複合名詞の前部要素が２拍以下の語根から成る場合には、一般複合法則が成立し、その結果、前部要素の型がそのまま複合名詞全体の型になる。

その特徴は、次の例から明らかである。ここでは、特に下線部の型に注目してほしい。（この方言では、「が」などの１拍の助詞を名詞に後続させると、Ｂ型から始まる文節末の１拍が ハ［ナ！ガ…（花が）のように低く付く傾向が著しい。そのため、特に２拍名詞に１拍の助詞が後続した場合に、２種類の型の峻別が難しくなる[8]ことが多かった。その２種類の型を明瞭に区別して記述するために、この方言ではすべての名詞に、２拍の助詞「まで」を後続させた形式でも調査を行った。以下には、その「まで」を後続させた文節の型を載せることにする。）この例の中の前部要素を構成する語根のうち、「桐、蝉、葱、紙、薬、魚、田舎、小麦、鹿児島」はＡ型の、「海苔、草、花、芋、硯、苺、蓬、蜜柑、沖縄」はＢ型の名詞である。

---

[7] 調査は1997年３月に行われた。話者はＣ氏（昭和２年１月生まれ、男性）とＤ氏（昭和６年３月生まれ、女性）の２名である。

[8] Ａ型の ア［メ］ガ…（飴が）と Ｂ型の ア［メ！ガ…（雨が）、あるいはＡ型の タ［ビ］ガ…（旅が）と Ｂ型の タ［ビ！ガ…（足袋が）、またはＡ型の ハ［シ］ガ…（橋が）と Ｂ型の ハ［シ！ガ…（箸が）、などがその好例である。このような場合、両型ともその文節末の拍直前に明瞭なピッチ下降が聞きとれるために、その２種類の型の区別がとりわけ困難に感じられた。

(14) 佐賀県鹿島市方言の一般複合法則とその例外[9]

前部要素の型が	A型の場合			B型の場合			
a. 桐	キリ］まで…	桐箱	キリ］バコまで…	海苔	ノ［リ まで…	海苔箱	ノ［リバコまで…
蝉	セミ］まで…	蝉篭	セミ］カゴまで…	草	ク［サまで…	草篭	ク［サカゴまで…
葱	ネギ］まで…	葱畑	ネギ］バタケまで…	花	ハ［ナまで…	花畑	ハ［ナバタケまで…
紙	カミ］まで…	紙袋	カミ］ブクロまで…	芋	イ［モまで…	芋袋	イ［モブクロまで…
b. 薬	クス］リ まで…	薬箱	ク［スリバコまで…	硯	ス［ズリまで…	硯箱	ス［ズリバコまで…
魚	サカ］ナまで…	魚篭	サ［カナカゴまで…	苺	イ［チゴまで…	苺篭	イ［チゴカゴまで…
田舎	イナ］カまで…	田舎団子	イ［ナカダンゴまで…	蓬	ヨ［モギまで…	蓬畑	ヨ［モギダンゴまで…
小麦	コム］ギ まで…	小麦畑	コ［ムギバタケまで…	蜜柑	ミ［カンまで…	蜜柑畑	ミ［カンバタケまで…
鹿児島	カゴ］シマまで…			沖縄	オ［キナワまで…		
		鹿児島方言	カ［ゴシマホーゲンまで…			沖縄方言	オ［キナワホーゲンまで…

(14a) に見られるように、前部要素が２拍の語根から成る場合には、一般複合法則が成立し、複合名詞の型はその前部要素の型と同じものとなる。しかし、前部要素が３拍以上の語根から成る (14b) の例では、一般複合法則は成り立たず、その複合名詞の型は、(前部要素の型がどちらであるかとは無関係に) すべてＢ型で出現していることが分かる。

このように鹿島市方言では、前部要素が３拍以上の複合名詞において、Ａ型とＢ型の区別が消滅してしまう。つまりこの条件のもとでは、体系中の２種類の型の中和が見られるのである。

そればかりではなく、この鹿島市方言では、３つの語根から成る複合語においても、特徴的な中和現象が見られることが分かった。これは、[[[爪 ］切り ］鋏］のような構造を持つ３つの語根から成る複合語には、たとえその先頭の語根が２拍のものであっても、((14ｂ) に見られるものと同様な) 型の中和が生じる、という特徴である。

前述のように、鹿島市方言では、２つの要素から成る複合語の場合には、前部要素がＡ型でしかも２拍以下、という条件の場合には、キ［ズ］グスリ (傷薬) のように、複合語全体もＡ型となり、一般複合法則が成り立つ。しかし、その複合語にさらに「箱」を後続させて、全体を [[[傷 ］薬 ］箱 ］のような構造を持つ複合語に変えてやると、キ［ズグスリバコガ (傷薬箱が) のように、複合語全体の型はＢ型となってしまい、一般複合法則が成り立たなくなってしまうのである。

次はその具体例である。ここでは特に、下線部に注目してほしい。これらはすべて「爪」「虫」「竹」など、先頭の要素が２拍の語根から成っているが、それにもかかわらず、＊ツメ］キリバサミ のようなＡ型ではなく、ツ［メキリバサミ のようなＢ型の型で出現している。(このうち (15a) の例については、単語単独の言い切り形しか調べることができなかったため、この形を載せてある。) これらの例の中の前部要素のうち、「爪、竹、虫、蝉、梨」はＡ型、「糸、花、蜘蛛、蛇、松、米」はＢ型である。

---

[9] なお、これらの例の中の後部要素のうち、「箱」はＡ型 (ハコ］まで)、「篭」はＡ型 (カゴ］まで)、「畑」はＢ型 (ハ［タケ)、「袋」はＢ型 (フ［クロ)、「団子」はＢ型 ([ダンゴ)、「方言」はＡ型 (ホー］ゲンが) である。

(15) 佐賀県鹿島市方言の一般複合法則の例外（三要素から成る複合語その１）[10]

先頭の要素の型が	A型の場合	B型の場合
a.	ツ［メキリバサミ（爪切り鋏）	イ［トキリバサミ（糸切り鋏）
	タ［ケキリバサミ（竹切り鋏）	ハ［ナキリバサミ（花切り鋏）
b.	ム［シトリアミまで…（虫捕り網まで）	ク［モトリアミまで…（蜘蛛捕り網まで）
	セ［ミトリアミまで…（蝉捕り網まで）	ヘ［ビトリアミまで…（蛇捕り網まで）
	タ［ケクイムシまで…（竹喰い虫まで）	マ［ツクイムシまで…（松喰い虫まで）
	ナ［シクイムシまで…（梨喰い虫まで）	コ［メクイムシまで…（米喰い虫まで）

このように鹿島市方言では、３つの要素から成る複合名詞にも、特徴的な型の中和が観察される[11]ことが分かった。

ちなみに、同じ条件で、その先頭の要素が３拍名詞の場合にも型の中和が見られるが、これは予想通りである。以下は、先頭の要素が３拍の語根を持ち、３つの要素から成る複合語の例である。前部を構成する語根のうち「鰯、鰹」はA型の、「狐、蛙」はB型の名詞である。

(16) 佐賀県鹿島市方言の一般複合法則の例外（三要素から成る複合語その２）

先頭の要素の型が	A型の場合	B型の場合
	イ［ワシトリアミまで…（鰯捕り網まで）	キ［ツネトリアミまで…（狐捕り網まで）
	カ［ツオトリアミまで…（鰹捕り網まで）	カ［エルトリアミまで…（蛙捕り網まで）

---

[10] これらの例の後部要素のうち、「鋏」はB型（ハ［サミ）、「網」はB型（ア［ミが）、「虫」はA型（ム［シ］が）である。なお、２つ目の語根を構成する動詞「切る、取る、喰う」のアクセントについては、調査していない。

[11] すべての佐賀・長崎主流タイプの方言に、同様な型の中和が観察されるとは限らないようだ。筆者の熊本県天草郡旧・本渡市の調査（話者は昭和15年12月生まれ、男性）では、同様な条件（先頭の要素が２拍で、３つの要素から成る複合名詞）のもとでも型の中和は見られず、先頭の要素の型が複合語全体の型を決定していた（つまり、一般複合法則が成り立っていた）。次の例が、それを示す。

□熊本県天草郡旧・本渡市方言の一般複合法則（三要素から成る複合語の場合）

先頭の要素の型が	A型の場合		B型の場合	
カ［ミ］クズバコが…	（紙屑箱が）	イ［トクズバコが…	（糸屑箱が）
ツ［メ］キリバサミが…	（爪切り鋏が）	イ［トキリバサミが…	（糸切り鋏が）
カ［ミ］キリバサミが…	（紙切り鋏が）	ハ［ナキリバサミが…	（花切り鋏が）
タ［ケ］クイムシが…	（竹喰い虫が）	マ［ツクイムシが…	（松喰い虫が）
ナ［シ］クイムシが…	（梨喰い虫が）	コ［メクイムシが…	（米喰い虫が）

しかし、このような、語根が３つの要素からなる複合名詞の調査は、この方言では一人の話者に対してしか行っていない。今後さらに人数を増やして、再調査する必要があるだろう。

以上、鹿島市方言では、先頭の名詞が３拍の場合のみならず、それが２拍の場合であっても、その複合語が３つの語根から形成されていると、そこには一般複合法則は成り立たず、型の中和が生じてしまうことを見てきた。

4.2. 田浦方言における一般複合法則の規則性

さて、以上のような鹿島市方言の複合語の型の中和現象を念頭に置きながら、以下、今回調査した熊本県葦北郡芦北町の田浦方言の複合語のアクセントを検討してみよう。

結論から先に述べれば、田浦方言の複合名詞には、上述の鹿島市方言に生じるような型の中和現象はまったく観察されず、その複合語には、どのような条件においても、一般複合法則が例外なく成り立っていることが明らかになった。

まず以下の例は、前部要素が２拍の場合の複合名詞の例である。

(17) 芦北町田浦方言の一般複合法則（その１）[12]

前部要素の型が	A型の場合		B型の場合
紙	［カ］ミ	糸	イ［ト
紙が	カ［ミ］が…	糸が	［イ］ト［が…
紙屑	［カ ミ ク］ズ	糸屑	［イ］ト ク［ズ
桃	［モ］モ	豆	マ［メ
桃畑	［モ モ バ タ ケ]]	豆畑	［マ］メ バ タ［ケ
桃畑が	モ［モ バ タ ケ］が …	豆畑が	［マ メ バ］タ ケ［が…
葱	［ネ］ギ	麦	ム［ギ
葱畑	［ネ ギ バ タ ケ]]	麦畑	［ム］ギ バ タ［ケ
葱畑が	ネ［ギ バ タ ケ］が…	麦畑が	［ム ギ バ］タ ケ［が…

A型の語根から始まる複合名詞の単語単独言い切り形は、［カミク］ズ（紙屑）のように、文節末から数えて２つ目の拍直後にピッチの下降が出現する場合と、［モモバタケ]］（桃畑）のように、最後の拍が下降調となって実現する場合とが見られたが、どちらの場合にも一般複合法則は成り立っている、と考えてよい。これに対しB型の語根から始まる複合名詞には、（［イ］トク［ズのように）かならず重起伏音調が出現し、ここにも一般複合法則は成立している。つまり、どちらの型が前部要素になっても、その前部要素の型が、複合語全体のアクセント型を決定していることが分かる。

さて、前部要素が３拍以上の場合であるが、前節で見た鹿島市方言とは異なり、この田浦方言では、このような条件においても型の中和はまったく起こらず、例外なく一般複合法則が成り立っていた。次の例は、それを示している。

---

[12] これらの後部要素の語根のうち、「屑」はB型（［ク］ズ［が）である。「畑」のアクセントは、調査していない。

(18) 芦北町田浦方言の一般複合法則（その２）

前部要素の型が	A型の場合		B型の場合	
小麦	コ［ム］ギ		山葵	［ワ］サ［ビ
小麦畑	コ［ムギバタケ］］		山葵畑	［ワサビバ］タ［ケ
小豆	ア［ズ］キ		胡瓜	［キュ］ー［リ
小豆畑	ア［ズキバタケ］］		胡瓜畑	［キューリバ］タ［ケ
南瓜	［カボチャ］］		西瓜	［ス］イ［カ
南瓜畑	カ［ボチャバタケ］］		西瓜畑	［スイカバ］タ［ケ
キャベツ	キャ［ベ］ツ		苺	［イ］チ［ゴ
キャベツ畑	キャ［ベツバタケ］］		苺畑	［イチゴバ］タ［ケ
トマト	［トマト］］		茄子	［ナ］ス［ビ
トマト畑	ト［マトバタケ］］		茄子畑	［ナスビバ］タ［ケ
メロン	［メロ］ン		蜜柑	ミ［カン
メロン畑	メ［ロンバタケ］］		蜜柑畑	［ミカンバ］タ［ケ

複合動詞についても、同様な規則性が見られた。次に見られるように、ナラベ-（並べ）、アツメ-（集め）のように、その前部要素が３拍の語根から成る場合においても一般複合法則は成り立っており、型の中和はそこに生じなかった。

(19) 芦北町田浦方言の一般複合法則（その３）[13]

前部要素の型が	A型の場合		B型の場合	
並べる、並べた	ナ［ラベ］ル、ナ［ラベタ］］		集める、集めた	［ア］ツメ［ル、［ア］ツメ［タ
並べ始める	ナ［ラベハジメ］ル		集め始める	［ア］ツメハジメ［ル
忘れる、忘れた	ワ［スレ］ル、ワ［スレタ］］		覚える、覚えた	［オ］ボエ［ル、［オ］ボエ［タ
忘れ始める	ワ［スレハジメ］ル		覚え始める	［オ］ボエハジメ［ル
教える、教えた	オ［シエ］ル、オ［シエタ］］		数える、数えた	［カ］ゾエ［ル、［カ］ゾエ［タ
教え始める	オ［シエハジメ］ル		数え始める	［カ］ゾエハジメ［ル

さらに、前述の鹿島市方言とは異なり、この田浦方言では、３つの語根から成る複合名詞においても、その一般複合法則に例外は見られなかった。（今回の調査では、特にこの点について確認するために、三要素から成るさまざまな複合語を作成して調査を行った。）

以下は、「紙＋屑＋箱」のように、先頭の要素が２拍の語根で、「２拍＋２拍＋２拍」の構成から成る、６拍の長さの複合名詞のアクセント型である。すべての例に、一般複合法則が成り立っていることが分かる。

---

[13] この複合動詞の後部要素の動詞「始める」は、A型（ハ［ジメ］ル、ハ［ジメタ］］）である。

(20) 芦北町田浦方言の一般複合法則 （三要素から成る複合語その１）[14]

先頭の要素の型が	A型の場合		B型の場合
紙	［カ］ミ	糸	イ［ト
紙が	カ［ミ］が…	糸が	［イ］ト［が…
紙屑箱	［カ ミ ク ズ バ］コ	糸屑箱	［イ ト ク ズ］バ［コ
笹	［サ］サ	草	ク［サ
笹が	サ［サ］が…	草が	［ク］サ［が…
笹刈り鎌	サ［サ カ リ ガ］マ	草刈り鎌	［ク サ カ リ］ガ［マ
芝	［シ］バ	稲	イ［ネ
芝が	シ［バ］が…	稲が	［イ］ネ［が…
芝刈り鎌	シ［バ カ リ ガ］マ	稲刈り鎌	［イ ネ カ リ］ガ［マ
梨	［ナ］シ	米	コ［メ
梨が	ナ［シ］が…	米が	［コ］メ［が…
梨喰い虫	ナ［シ ク イ ム］シ	米喰い虫	［コ メ ク イ］ム［シ
竹	［タ］ケ	松	［マ］ツ[15]
竹が	タ［ケ］が…	松が	［マ］ツ［が…
竹喰い虫	タ［ケ ク イ ム］シ	松喰い虫	［マ ツ ク イ］ム［シ
烏賊	［イ］カ	鮎	ア［ユ
烏賊が	［イ カ が…	鮎が	［ア］ユ［が…
烏賊釣り舟	イ［カ ツ リ ブ］ネ	鮎釣り舟	［ア ユ ツ リ］ブ［ネ

さらに、先頭の要素が２拍の語根で、「２拍＋２拍＋３拍」の構成を持ち、全体の長さが７拍の複合名詞を発音してもらったところ、ここにも、一般複合法則が例外なく成り立っていた。

(21) 芦北町田浦方言の一般複合法則（三要素から成る複合語その２）[16]

先頭の要素の型が	A型の場合		B型の場合
紙	［カ］ミ	花	ハ［ナ
紙が	カ［ミ］が…～ カ［ミ が…	花が	［ハ］ナ［が…

[14] これらの複合名詞の第２要素を構成する語根のうち、「屑」はB型（［ク］ズ［が…)、「刈る」はB型（カッ［タ 刈った)、「喰う」はA型（［クッ］タ 喰った)、「釣る」はA型（［ツッ］タ 釣った）である。また、最終要素の語根のうち、「箱」はA型（ハ［コ］が…)、「鎌」はB型（［カ］マ［が…)、「虫」はA型（ム［シ］が…)、「舟」はB型（［フ］ネ［が…）である。

[15] 「松」の単独言い切り形は、期待されるマ［ツではなく、［マ］ツのような音調型を示していた。これには、この語の語末の母音/u/の無声化が関係しているのではないか、と思われる。

[16] これらの複合語を構成する語根のうち、「切る」はB型（キッ［タ 切った)、「鋏」はB型（［ハサ］ミ［が）である。

紙切り鋏	［カ ミ キ リ バ サ］ミ	花切り鋏	［ハ ナ キ リ バ］サ［ミ
紙切り鋏が	［カ ミ キ リ バ サ ミ］が…	花切り鋏が	［ハ ナ キ リ バ サ］ミ［が…
爪	［ツ］メ	糸	イ［ト
爪が	ツ［メ］が…	糸が	［イ］ト［が…
爪切り鋏	［ツ メ キ リ バ サ］ミ	糸切り鋏	イ［ト キ リ バ］サ［ミ
爪切り鋏が	［ツ メ キ リ バ サ ミ］が…	糸切り鋏が	イ［ト キ リ バ］サ ミ［が…

同じ７拍の長さを持ち、語根が「３拍＋２拍＋２拍」の構成から成る場合についても検討したが、ここにも型の中和は見られず、一般複合法則が成立していた。

(22) 芦北町田浦方言の一般複合法則　（三要素から成る複合語その３）[17]

先頭の要素の型が	A型の場合		B型の場合
薪	タ［キ ギ］］	鉋	［カ］ン［ナ
薪が	タ［キ ギ］が…	鉋が	［カ ン］ナ［が
薪屑	タ［キ ギ ク］ズ	鉋屑	［カ ン］ナ ク［ズ
薪屑箱	［タ キ ギ ク ズ バ］コ	鉋屑箱	［カ ン ナ ク ズ］バ［コ

すなわちこの田浦方言では、複合語の構成が３つの要素から成る場合でも、型の中和現象はまったく観察されない、と言ってよいだろう。

以上、一般複合法則は、この田浦方言では例外なく成り立っていることを見てきた。したがって、この方言の複合語のアクセント型は、各複合語の先頭の要素の型によって決定される、と記述できる。この点においてこの田浦方言は、佐賀・長崎主流タイプの二型アクセント体系とは、その性質が大きく異なる体系を持っている、と言える[18]。

松森（2017b）は、長崎県の旧・外海町、同県の波佐見町や鹿児島県の出水市など、佐賀・長崎主流タイプの体系を取り囲むように分布する、その２種類の型の特徴が佐賀・長崎主流タイプのそれとは異なる特徴を持つ二型アクセント体系には、複合語内部の型の中和現象が見られない、という予測を行っている。今回提示したこの田浦方言のデータは、その予測の妥当性を裏付けるものである。

---

[17] これらの複合語を構成する語根のうち、「屑」はB型（［ク］ズ［が)、「箱」はA型（ハ［コ］が…）である。

[18] 松森（2017b）は、このようにB型が平板な音調型であることと、複合語の型の中和が見られることの間には、相関関係がある、という仮説を提示している。すなわち型の中和が生じる体系の条件は、B型が本稿の（3）に示した最終段階の変化（*HHLH > HHHM（HHHH））を経ていることである、という仮説を松森（2017b）は提示したのである。現代の体系において、そのB型に重起伏音調が観察される田浦方言では、佐賀・長崎主流タイプに見られるような複合語の型の中和は見られない。この事実は、上述の仮説を裏付けるひとつの証拠となるだろう。

さて、語全体の長さを長くしていっても、一般複合法則に例外が見られないかを検討するために、次のような複合語を作って、語を８拍、９拍と長くしていき、そのアクセント型を観察した。以下は、「２拍＋３拍＋３拍」、「３拍＋３拍＋３拍」という語根の構成を持ち、３つの要素から成る複合語の例である。このような場合にも、一般複合法則は例外なく成り立つことが分かった。

(23) 芦北町田浦方言の一般複合法則（三要素から成る複合語その４）[19]

先頭の要素の型が	A型の場合		B型の場合	
桃畑作り	［モモバタケツク］リ		豆畑作り	［マメバタケツ］ク［リ
桃畑作りが	モ［モバタケツクリ］が…		豆畑作りが	［マメバタケツ］ク リ［が…
葱畑作り	［ネギバタケツク］リ		麦畑作り	［ムギバタケツ］ク［リ
葱畑作りが	ネ［ギバタケツクリ］が…		麦畑作りが	ム［ギバタケツク］リ［が…
小麦畑作り	コ［ムギバタケツク］リ		山葵畑作り	ワ［サビバタケツ］ク［リ
小麦畑作りが	コ［ムギバタケツクリ］が…		山葵畑作りが	ワ［サビバタケツク］リ［が…
南瓜畑作り	カ［ボチャバタケツク］リ		西瓜畑作り	［スイカバタケツ］ク［リ
南瓜畑作りが	カ［ボチャバタケツクリ］が…		西瓜畑作りが	［スイカバタケツク］リ［が…

さてこの（23）の例のように、文節全体を長くしていくと、この田浦方言の２種類の型の特徴が、特に顕著になる。

（8）では、この田浦方言では、A型は原則的に文節の末尾から数えて２つ目の拍の直後にピッチ下降を持ち、B型は重起伏音調を持つ、という記述を行った。

（23）の例を観察すると、この体系内の２種類の型は、A型（あるいはA型の語根から始まる複合語）のほうは、文節の最後の１拍が下がって終り、B型（あるいは、B型の語根から始まる複合語）のほうは、文節の最後の拍がかならず上がって終わる。つまり、この方言の弁別的な特徴は文節の最後尾に出現する、ということが分かる。

５．田浦方言の二型アクセント体系についての共時的考察

さてこの節では、第３節において記述した、田浦方言の二型アクセント体系における２種類の型の特徴に再び焦点を当てて、それがなぜ現状のようになっているのかについて、考えてみることにしよう。

田浦方言では、そのB型に重起伏音調が安定して観察されることは、すでに 3.3 節で述べたとおりである。これに対してそのA型のほうには、文節の最後尾から数えて２つ目の拍から、文節の最後尾の拍のほうへと、現在、そのピッチ下降の位置が移行しつつある、という観察結果も、すでに 3.2 節で提示した。

つまり、この方言では現在、（B型ではなく）A型のほうに、（ピッチの急激な上昇や下降がな

[19] 最終要素の派生名詞「作り」（あるいはその動詞形「作る」）のアクセントについては、調査を行っていない。

い）平坦な型が生じる方向への変化の兆候が見られるのである。田浦方言の二型アクセント体系は（6）の図式においてすでに提示しているが、上述のようなＡ型の変化の兆候を考慮に入れて、この（6）に多少修正を加えるとすれば、次のようになるだろう。

(24) 芦北町田浦方言の二型アクセント体系における２種類の型の違い

Ａ型	ＨＬ	ＨＨＬ	ＨＨＨＬ	ＨＨＨＨＬ	ＨＨＨＨＨＬ
	（ＨＨ	ＨＨＨ	ＨＨＨＨ	ＨＨＨＨＨ	ＨＨＨＨＨＨ）
Ｂ型	ＬＨ	ＨＬＨ	ＨＨＬＨ	ＨＨＬＬＨ・ＨＨＨＬＨ	ＨＨＨＬＬＨ・ＨＨＨＨＬＨ

さて、田浦方言の体系内のＡ型にこのような変化の兆しが見られることと、同じ体系内のＢ型に重起伏音調が安定して観察されることとは、おそらく無関係ではないだろう。

一般に、ひとつのアクセント単位内に、Ｈ音調の山が二箇所に分かれて生じる重起伏音調は、「語や文節の境界を表示する」というアクセントの持つ機能のためには、あまり望ましい型とは言えない。そのため一般的に、この重起伏音調を持つ型は、より安定した別の型へと変化していきやすい（松森2017b: 60-61）、と考えられている。

たとえば、本稿の（3）で示したように、佐賀・長崎主流タイプの祖体系では、いったんＢ型に生じた重起伏音調が、*HLLH > *HHLH > HHHM（HHHH）のような一連の変化過程を経て、最終的にはその重起伏音調を解消し、平坦な型へと変化した、と松森（2017b）は推定している。このことも、重起伏音調がそもそも消滅しやすいものである、という前提に基づいている。

しかしながら、この田浦方言のＢ型には、同じような変化は生じる気配はなく、重起伏音調が安定して維持されている。この背後には、すでに同じ体系内のＡ型が、現在、それに先んじて、平坦な型へと変化を遂げつつある、という事実が関与しているだろう。

仮に（3）の佐賀・長崎主流タイプに想定された一連の変化（*HLLH > *HHLH > HHHM（HHHH））がこの田浦方言のＢ型にも起こってしまえば、そのＢ型の重起伏も、体系内のＡ型と同じような平坦な型へ変化することになる。もしこのような変化が生じるとすれば、この体系は、その内部の２種類の型が両者とも HHH、HHHH、HHHHH… のような型となってしまい、その結果、型の区別の維持が困難になってしまう。これを避けるためには、Ｂ型は、現在のように重起伏音調のまま、とどまるほかはない。

このように本稿は、この田浦方言において現在そのＢ型の重起伏音調が明瞭に保たれていることの背後には、体系上の理由がある、と考えるのである。

６．田浦方言の通時的意味と葦北郡の二型アクセント体系の記述研究上の課題

さて、この後、この田浦方言のＢ型の重起伏音調には、いったいどのような変化が生じていくのだろうか。これを完全に予測することはできないが、生じやすい変化の過程にはどのようなものがあり得るかを、推定してみることはできるだろう。

このことと関連し松森（2017b: 注30）は、九州二型アクセント体系には、「型の両極化」とも

いうべき一般傾向[20]が見られる、という記述観察を行った。これは、体系内で対立する２種類の型のうちの一方が、際立ったピッチ下降（アクセント）を持つ型へと変化を遂げた場合、もう一方の型は、あえてそのようなピッチの下降（アクセント）を持たないような型（すなわち平坦な型）へと変化することによって、その体系内の２種類の型の間の明瞭な区別を維持しようとする一般傾向[21]である。

本稿で扱った田浦方言は、上述のケースとはちょうど逆のタイプの「型の両極化」傾向を示している、と捉えることも可能であろう。この体系では、対立する２種類の型のうちの一方（Ａ型）が、すでに際立ったピッチ下降（アクセント）を持たないような型（すなわち平板な型）へと変化する兆候を示している。そのような中、もう一方の型（Ｂ型）は、あえてそのピッチ下降を現状のまま保つことによって、その２種類の型の明瞭な対立を維持している、と考えることも可能だからである。

したがって、上述の（3）に示されたような最終段階の変化（*ＨＨＬＨ＞ＨＨＨＨ）は、おそらく今後も、この田浦方言のＢ型には生じない可能性が高い。なぜならばこの方言では、（Ｂ型に先んじて）すでにＡ型のほうが、現在 HHHL ＞ HHHHのような変化によって、平坦な型へと変化を遂げつつあるからである。

もし、この後、この体系内のＡ型のほうが（Ｂ型より先に）平坦な音調型に変わる、という傾向がさらに進行していくならば、おそらくＢ型には、似たような型に変化するのをあえて避けるような方向への体系の力が及ぶに違いない。おそらくＢ型はこの後、一峰化（*HLH＞ HLL）によって、その重起伏音調を解消する方向へと向かうのではないだろうか。

その結果、以下の（25）に示されたような二型アクセント体系が、次の段階として、発生することが予想される。この体系では、Ａ型が平坦な型を持つ一方で、Ｂ型のほうは、その文節の最後尾から数えて３つ目の拍直後に、急激なピッチ下降が出現している。

（25）芦北町田浦方言の周辺に存在する可能性がある二型アクセント体系

Ａ型	ＨＨ	ＨＨＨ	ＨＨＨＨ	ＨＨＨＨＨ	ＨＨＨＨＨＨ
Ｂ型	ＬＨ	ＨＬＬ	ＨＨＬＬ	ＨＨＨＬＬ	ＨＨＨＨＬＬ

同じ芦北町のこの田浦方言の周辺地域には、（25）のような体系がすでに存在していたとしても、おかしくない。このような型の実質を持った二型アクセント体系は、この方言の周辺に発見でき

[20] これには一部の例外がある（つまり、すべての九州二型アクセント体系が、その一般傾向に従っている、というわけではない）。その一例が、甑島の諸方言であろう。甑島の諸体系には、その助詞付き接続形において、Ａ型、Ｂ型の両者にピッチの急激な下降が観察される。したがって甑島には、その体系内部の2種類の型が、ピッチ下降の「位置」によって区別されるような体系が、数多く見られるのである。

[21] 松森（2017b）では、このような「型の両極化」の一般傾向のために、現代の佐賀・長崎主流タイプの諸体系では（すでにピッチ下降を持つ型に変化を遂げていたＡ型との区別化のために）、そのＢ型が平坦な型へと変化を遂げた、という仮説を提示した。

ないだろうか。このような見通しを持って、今後、さらに詳しい調査を行っておきたい。

さて、ここでひとつ気付くのは、(25) に示した体系は、木部 (2001a, b) が記述した種子島の中種子(なかたね)方言の体系とよく似た特徴を持っている、という点である。木部 (2001a: 25) によれば、この中種子方言は、①最後まで平らな音調が続く型と、②末尾の２音節（２音節語の場合は、末尾の１音節）が低くなる型、との２種類の型から成りたっている、という。

木部 (2001a: 25) に示された表が、その中種子方言の二型アクセント体系の特徴を分かりやすく示しているので、以下に引用することとする。

(26) 中種子方言のアクセント体系[22]　　(木部 2001a: 25 による)

α型	○	○ [○	○ [○○	○ [○○○	○ [○○○○	○ [○○○○○
β型	○	[○] ○	[○] ○○・○ [○] ○	○ [○] ○○	○ [○○] ○○	○ [○○○] ○○

木部 (2001a) に挙げられた各型の所属語彙[23]を検討してみると、そのα型が、本稿のＡ型に対応し、そのβ型が、本稿のＢ型に対応している。つまりこの中種子方言は、Ａ型のほうが平坦な型で出現するのに対して、Ｂ型のほうが急激なピッチ下降を持つような型になっている。この点において中種子方言は、現代の佐賀・長崎主流タイプの体系[24]とは、その内部の型の性質が、ちょうど逆転したような特徴を持っている。

さて、本稿で扱った熊本県葦北郡の田浦方言は、(26) に示した中種子方言のような体系が生

---

[22] 木部 (2000、2001b) は、中種子方言の祖体系に「鹿児島式」の二型アクセント体系（現代鹿児島市方言の体系と同じ２種類の型を持つ体系）を想定しながら、現代の中種子方言の体系の成立過程についての通時的解釈を行っている。これに対し筆者は、中種子方言の体系は、おそらく鹿児島式の二型アクセント体系から生じたのではなく、本稿の (2) のような祖体系から直接（鹿児島式の体系を経ずに）、変化して生じたものではないか、という仮説を抱いている。しかしこの考察のためには、種子島諸方言の、調査による詳細な記述・考察が不可欠であり、したがって現時点では断定は避けたい。この問題については、別の機会に論じることとする。

[23] その２種類の型の所属語彙を、紙幅の制約の都合上、その２拍名詞だけに限って、以下に、木部 (2001a) から引用して載せることとする。α型の所属語彙　魚（イオ）、風（カゼ）、桐（キリ）、口（クチ）、腰（コシ）、胡麻（ゴマ）、酒（サケ）、爪（ツメ）、鳥（トイ）、 西（ニシ）、鼻（ハナ）、羽根（ハネ）、右（ミギ）、水（ミズ）、道（ミチ）、虫（ムシ）、桃（モモ）、森（モリ）、川（カワ）、夏（ナツ）、肘（ヒジ）、人（ヒト）、昼（ヒル）、胸（ムネ）、雪（ユキ）。β型の所属語彙　足（アシ）、草（クサ）、靴（クツ）、雲（クモ）、米（コメ）、竿（サオ）、塩（シオ）、霜（シモ）、尻（シリ）、墨（スミ）、月（ツキ）、面（ツラ）、花（ハナ）、腹（ハラ）、孫（マゴ）、耳（ミミ）、山（ヤマ）、指（ユビ）、馬（ンマ）、糸（イト）、海（ウミ）、型（カタ）、鎌（カマ）、今日（キョー）、筋（スジ）、空（ソラ）、中（ナカ）、針（ハリ）、味噌（ミソ）、麦（ムギ）、秋（アキ）、雨（アメ）、声（コエ）、露（ツユ）、鶴（ツル）、鍋（ナベ）、春（ハル）、前（マエ）、窓（マド）。

[24] 佐賀・長崎主流タイプの二型アクセント体系では、Ａ型のほうにピッチの急な下降（アクセント）が出現し、Ｂ型のほうには、際立ったピッチの上昇や下降の見られない、比較的平坦な型が観察されている。

じる一段階前の状態（一歩手前の体系）を示している[25]、と言えるのではないだろうか。

このことから、おそらく中種子方言にも、かつては、本稿で記述した田浦方言と同様、過去の一時期、そのＢ型が重起伏音調を持っていた時代があったのではないか、と推定される。しかしながらこの方言では、Ａ型のほうが先に平坦な型へと変化を遂げてしまった。そのＡ型との型の区別を維持するために、同じ体系内のＢ型はその後、一峰化（*ＨＨＬＨ　＞ＨＨＬＬ）によって、その２つの高いピッチの山のうちの一つ目を生かし、２つ目を消滅させるような方向へと、変化を遂げた。その結果、最終的に（26）のような体系が成立した、と考えてみることができるだろう。

筆者は、これまでに種子島の現地調査を行ったことがない。そのため、この推理の妥当性について判断を下すことは（現時点では）難しい。しかしながら、中種子方言の二型アクセント体系も、おそらく本稿で考察した田浦方言と似たような体系を経たうえで、その内部の型の特徴が、佐賀・長崎主流タイプのそれとはちょうど逆になるような体系へと変化を遂げた、というひとつの「仮説」は、本稿において提示しておきたい。

今後、この田浦方言（とそれを取り巻く芦北町の諸方言）の二型体系を、より詳細に調査・記述することによって、（現代の中種子方言のような）その２種類の型の特徴が佐賀・長崎主流タイプとはちょうど逆転するような二型アクセント体系が、いったいどのようなプロセスを経て現代に生じてきたのか、という疑問について答えるための、ひとつの手がかりが得られる可能性がある。

７．まとめ

以上、本稿では、熊本県葦北郡芦北町の田浦方言の体系は、佐賀・長崎主流タイプ、旧・外海町、出水市方言の、どの体系とも異なる特徴を持った二型アクセント体系であることを見てきた。

また、田浦方言の複合名詞には、上述の鹿島市方言を代表とする佐賀・長崎主流タイプに生じるような型の中和現象は観察されず、そこには一般複合法則が、どのような条件においても例外なく成り立っていることも見てきた。

また本稿では、松森　（2017a）において報告された長崎県の旧・外海町の体系にひき続き、この田浦方言においても、その体系内のＢ型に、ＨＬＨ、ＨＨＬＨ、ＨＨＬＬＨ…のような、文節内部に２つの高い音調の山が出現する、重起伏音調が観察されることを報告した。

佐賀・長崎主流タイプの体系を取り巻くように分布している長崎県や熊本県の諸方言には、おそらく今後も、そのＢ型に重起伏音調が観察される体系が発見される可能性が高い。このような見通しのもとに、今後、詳細な記述調査を行っていく必要があるだろう。

また本稿では、一般的に「消滅しやすい」と考えられている重起伏音調が、現在の田浦方言で

---

[25]　もちろんこのことは、田浦方言と種子島の中種子方言が同系統である（あるいは系統的に近い）ということを意味しない。両者は、それぞれ別個に（まったく独立して）、似たような体系を発達させたものと思われる。九州二型アクセントの祖体系には、この両方の体系の発生を自然に説明できるような体系を建てる必要があるだろう。

は安定的に維持されている、という事実を報告し、このようにＢ型の重起伏音調が消滅の傾向を示していないことの背後には体系的な理由がある、と論じた。田浦方言では、すでにＡ型のほうが、（たとえば キ［ズガ…（傷が）のように）平坦な型へと変化を遂げつつあり、それとの対立を維持しようとする体系上の力がそのＢ型のほうに働いている、と推定したのである。

つまり、現代の田浦方言の体系内のＢ型の重起伏音調の示す安定性と、そのＡ型に現在起こりつつある変化との間には相関がある、という考察を本稿は行ったことになる。

さらに本稿では、九州二型アクセント体系に観察されている「型の両極化」という一般傾向に鑑みて、おそらくこの田浦方言のＢ型には、今後も、佐賀・長崎主流タイプの二型アクセント体系に起こった（と松森 2017b が推定した）ような変化（*ＨＨＬＨ＞ＨＨＨＨ）は起こらないだろう、という予測も行った。

おそらくこの方言のＢ型は、今後、*ＨＨＬＨ＞ＨＨＬＬ（一峰化）を経ることによって、その１つ目のＨ音調（と、そのピッチ下降の位置）を維持し、２つ目のＨ音調のほうを消滅させるような方向へと、変化を遂げるにちがいない。そのためこのＢ型は、今後、文節の最後尾から数えて３つ目の拍直後にピッチの下降を持つような型へと、変化していく可能性が高い。

同じ葦北郡の他の方言の中に、すでにそのような特徴を備えた体系が、今後、発見できるのではないだろうか。このような見通しのもとに、さらに詳しくこの地域のアクセントを調査していく必要があるだろう。

また本稿では、この田浦方言（および、それを取り巻くように分布している葦北郡の二型アクセント体系の諸方言）の記述が、（たとえば現代の種子島に報告されているような）その２種類の型の特徴が佐賀・長崎主流タイプとはちょうど逆になっているような体系が、いったいどのような変化のプロセスによって生じ得るのか、という問題について考える際に、役立つ視点を与えてくれる可能性があることも論じた。

佐賀・長崎主流タイプを取り巻くように分布している長崎県や熊本県の二型アクセント体系の記述研究は、今後、現代の多様な九州二型アクセント体系の成立プロセスを解明するためのひとつの手がかりを提供することにもつながるだろう。

参照文献

木部暢子（2000）『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版

----------（2001a）「中種子方言のアクセント」『種子島方言辞典』 武蔵野書院　pp.25-36.

----------（2001b）「中種子町方言のアクセント―助詞・助動詞―」『筑紫語学論叢―奥村三雄博士追悼記念論文集―』 風間書房　pp. 449-465.

----------（2012）「西南部九州２型アクセントの特性の比較―助詞・助動詞のアクセントを中心として―」『音声研究』第16巻第１号: 80-92.

平子達也・五十嵐陽介（2016）「佐賀県中南部諸方言の二型アクセントについて」『実践国語学』第89号：(18)-(56)

平山輝男（1951）『九州方言音調の研究』東京：學会之指針社.

松浦年男（2005）「島原市方言における複合語音調の中和と外来語音調」『音韻研究』８号: 49-57.

----------（2008）「長崎市方言における例外的複合語アクセントの生起条件」『音韻研究』 11号: 11-19.

----------（2014）『長崎方言からみた語音調の構造』東京：ひつじ書房

松森晶子（2017a）「長崎県西彼杵郡旧・外海町の二型アクセント体系」『日本女子大学紀要 文学部』第66号：31-46.

----------（2017b）「九州二型体系の複合語アクセント型はなぜ中和するのか―通時的視点から探る―」『日本語の研究』第13巻 4 号: 51-67. 日本語学会